

◇「願以此功德…」の言葉には、  
どういいう意味があるのか？

仏前の勤行の終わりに唱える偈文のことを回向あるいは回向句  
といえます。回向句にもいろいろあります。たとえば葬儀の際の  
出棺勤行では、龍樹菩薩の「十二礼」の「我説彼尊功德事 衆善  
無辺如海水 所獲善根清浄者回施衆生生彼国（われ、かの尊の  
功德の事を説くに、衆善無辺にして海水のごとし。獲るところの  
善根清浄なれば、衆生に回施してかの国に生ぜんせしめん）」  
の文が用いられていますし、「往覲偈」の「其仏本願力 聞名欲  
往生 皆悉到彼国 自致不退転（その仏の本願力、名を聞きて往  
生せんと欲へば、みなことごとくかの国に到りて、おのづから不  
退転に到る）」なども、よく用いられる回向句です。今ご質問の  
言葉も数ある回向句の中の一つです。

それではなぜお勤めの最後に回向句を唱えるのでしょうか。  
子登の「真俗仏事編」三には、「亡者のために経を誦み、真言陀羅尼  
を唱ふ、その功德を回らして、彼の亡者に向はしむ故に回向とい  
ふ」とあります。これによれば回向句を唱える異議は、仏事法要  
を勤め、その功德をもって亡くなった方および一切衆生に分ち  
与え、その方がたの仏道を成就させようとするところにあると  
いうのです。この考え方が一般的なのでしょう。

しかし浄土真宗は自ら修めた功德を回向して仏道を成就しよう

とするものではありません。阿弥陀如来の回向えこうによる仏道の成就を目指しています。よって回向句えこうも、自らが仏事法要を修めた功德を他の人々に回向えこうするという性格のものではないことは明らかです。

「願がんに以此功德」等のご文は、善導大師のお書きになった『觀經疏』「玄義分」の巻頭に示された「歸きさん三宝偈」の最後の一行四句です。善導大師が『觀經疏』をおつくりになったのは、僧も俗も含めたすべての人々に、ただ信心をいただいて欲しいという思いからです。そのお心がこの「歸きさん三宝偈」に一貫して流れています。下文の初めには「道俗時衆等 各發無上心かくほつむじょうしん（道俗時衆等、おのおの無常の心を發こせ）」といい、次に「共發金剛志ぐほつこんごうし（ともに金剛の志を發して）」といい、最後に「同發菩提心（同じく菩提心を發して）」とあります。無常心といい、金剛志といい、菩提心と言ひ方は異なっていますが、意は一つであつて、ただ他力の信心をいただいて欲しいという善導大師のお心を示しています。

この善導大師のお心に添つて、「願以此功德」以下四句の意味を窺うかがつてみますと、まず「此功德」とは、名号の功德、阿弥陀如来の人々を救う働きと解することができます。そして「平等施一切（平等に一切に施し）」とは、行者自らが修めた功德を回向することをいっているのではなく、「此の功德」をいただいた念仏者の常行大悲じょうぎようだいひのすがたをあらわしたものです。阿弥陀如来の功德（名号）をいただいた念仏者は、現生げんしょう十種の利益の一つである常行大悲の利益を得ることができます。親鸞聖人は十種の益

について、『教行信証』「信卷」真仏弟子釈下経文や釈文を引いて明らかにしています。常行大悲については、道綽禪師の『安樂集』を引き、次のように示しています。

『大悲経』にのたまはく、

「いかんが名づけて大悲とする。もしもつばら念仏相續してたえざれば、その命終に随したがいてきだめて安樂に生ぜん。もしよく展てんでん転してあひ勧めて念仏を行ぜしむるは、これらをことごとく大悲を行ずる人と名づく」と

これによれば、常行大悲とはまず自らが念仏することであり、他の人々に念仏を勧めることであると示されています。自ら念仏すること（自信）が、すなわち他の人々に念仏を勧めることになる（教人信）ということなのです。この教人信を示しているのが、「平等施一切（平等に一切に施し）」のご文です。

また「同発菩提心 往生安樂国（同じく菩提心を発して、安樂国に往生せん）」ですが、菩提心とは他力の信心のことであり、安樂国とは阿弥陀如来の浄土のことですから、阿弥陀如来の浄土に往生しよう、という意味になります。つまりここでも、『観経疏』「玄義分」に一貫している信心を勧める善導大師のお心を知ることができます。そのお心をいただき、回向句として経典きょうてん読誦の最後にお勤めしているのです。決して経典読誦の功德を回向するといった意味ではありません。